



作家
元国際線乗務員
黒木安馬

【プロフィール】高校時に米国留学後、早稲田大学を経てJAL国際線客室乗務員として30年勤務。世界初の「カラオケ・フライト」や「1万メートル上空・北島三郎機上コンサート」などを実現させる。千葉の自宅は1300坪の山林を開墾してプール、テニスコート、コンサートホール等を手作りする。現在、㈱日本成功学会社長として自己啓発や社員教育で講演中。著書に「成「幸」学」（講談社）、「あなたの人格以上は売れない!」（プレジデント社）、「出過ぎる杭は打ちにくい!」（サンマーク出版）、「面白くなくちゃ人生じゃない!」（ロングセラーズ）、「リセット人生・再起動マニュアル」（ワニブックス）、「小説・球磨川」（上下巻・ワニブックス）などがある。
E-mail:yasuma@myad.jp URL:http://www.3percent-club.com

21世紀だ! ————— 人生・農業リセット再出発 149

水戸黄門の諸国漫遊記

「^{いんろう}この印籠が目に入らんか、天下の副将軍なるぞ!」

この名ゼリフで、悪代官を「ハハッ〜!!」と言わせて平服させる葵の紋の水戸黄門。紀州・尾張・水戸の徳川御三家、その常陸の国・水戸の二代藩主である徳川光圀公は家康の孫に当たる。その黄門さま直筆!?の掛け軸が売りに出されているということがいろいろ調べてみるきっかけになった。

おなじみの助さんは彰考館の史官である佐々木宗淳介三郎のことであり、格さんは家臣の渥美格之進である。テレビの好々爺のように剣術の腕っ節のほどは分からないが、各地を歩いて記録を残した点ではかなり有能な人物だったようだ。だが、私が何を調べても、主従3人が日本全国を漫遊したという史実や証拠はどこにも残っていない。それどころか、領国以外では水戸と江戸を往復するのみで、日光東照宮への参詣と鎌倉に一度旅行した事実が明らかになっただけだった。

光圀公は少年のころ、奔放な生活を送り、江戸の町を遊び回って「言語道断のかぶき者」と評されている。傾奇者（歌舞伎者・かぶきもの）とは、室町、江戸時代初期にかけて江戸や京都などの都市部で流行したもので、男伊達を競い、派手な身なりや異風を好み、常識を逸脱した行動に走る者たちのことを指す。今でいうヤンキーだ。茶道や和歌などを好む者を数寄者と呼ぶが、数寄者よりさらに数寄に傾いた者という意味だろう。1657年、光圀30歳のとき、国史の編集を始め、間もなく水戸藩の殿様となって殖産産業を図る一方、江戸小石川藩邸内に史局を設けて彰考館と名付けた。『春秋左氏伝』の杜預序の語、「彰往考来（往事を彰らかにし、来時を考察する）」に由来する。幕府の『本朝通鑑』の向こうを張って

より本格的な歴史書を作り、藩士らに道德の基準を示そうとした。1690年に隠居した後は、水戸郊外の西山に住み、文筆に専念したとある。全国行脚で一斉を風靡した世直しの水戸黄門さまの実態は……残念ながら、本来はこのお堅い話が事実であった。黄門とは中国の宮殿の門のこと。秦や漢で宮殿の門が黄色に塗られていたことに由来し、中国皇帝の勅命を伝える職務だった黄門侍郎の正式通用門であり、日本の中納言を黄門というようになったとある。

『黄門漫遊記』は、後世の講談師の作り話で、その時代に犬公方といわれ、「生類憐みの令」で世を苦しめた五代將軍綱吉と対比して面白く作られたものらしい。蚊1匹すら殺してはいけないという悪政に苦しみ庶民にとっては、正義の味方、胸のすくようなこの世の救い主として迎えたかったのだろう。

ちなみに、豊臣秀吉が一般に知られているのは、「サル!」と呼ばれた……と世間にはあるが、主君の織田信長が書いた手紙で唯一残っているものには「ハゲネズミ!」としか書かれていない。そんな秀吉をサルと呼んで面白おかしく、ちまたで講談にしたのは200年以上も経ったころのことなのである。

何はともあれ、歴史は面白おかしく作りかえられていくものである。私が書いた長編歴史ミステリー口マン平家伝説『小説・球磨川』でも、フィクションや創造をふんだんに取り入れて自由奔放に我なりの空想で書いたが、九州南部の山間地である過疎の取材地を十数年ぶりに訪ねてみて驚いた。観光名所のそれぞれには、拙著から引用した筋書きや由来がふんだんに、まるで伝説や史実であるかのごとく、説明書きがなされていたのである。他の動物と違う人間の素晴らしさは、どんな苦痛の過去も、美しく楽しかった思い出に変えてしまう能力にある!